



図-7 植栽適地の一例（勝央町河原地内）
（左側：植栽時 右側：植栽5年目）

3 品種特性

（1）果実特性

- ・「岡山1号」の果実サイズは、在来品種とチュウゴクグリ（輸入栗：天津甘栗*）との中間である（図-8 参照）。
- ・「岡山3号」の果実サイズは、チュウゴクグリ（輸入栗）と同サイズか、やや小さい。
- ・クリの横幅に占める「座*」の割合は、両品種とも、ニホングリに比べ、明らかに小さい（表-3 参照）。
- ・両品種ともに、果頂部*に「毛じ（もうじ）*」がある（図-9 参照）。
- ・渋皮離れが良い（図-10 参照）。
- ・果肉の色（黄色）が濃い。
- ・甘みが強い。
- ・果実被害（虫害）が極めて少ない。



図-8 在来品種と岡山甘栗の大きさの比較

表-3 果実等の特性 (岡山県森林研究所 2004~2006年)

品種名	原産地 (中国の省)	果実					
		果形	果皮色	座の大きさ	接線の形 (全形)	毛じ	果重 (g)
岡山1号	遼寧省	扁平形	赤褐色	小	やや湾曲	多い	16.0
岡山3号	湖南省	扁円形	褐色	小	やや湾曲	多い	5.8
筑波	日本	帯円	赤褐色	中	やや湾曲	少ない	28.3
利平グリ	日本	扁円形	暗紫色	小	湾曲	多い	27.9
品種名	ぎゅう果		果肉				果実の 虫害率 (%)
	形	とげの長さ (mm)	洗皮はく 皮の難易	色	肉質	糖度 (%)	
岡山1号	扁球	12.2	易	濃黄色	粉質	28.7	1.7
岡山3号	扁平	10.6	易	濃黄色	粉質	35.2	0.3
筑波	やや扁形	27.9	難	黄色	粉質	-	-
利平グリ	やや扁形	24.4	中	黄色	粉質	-	-

注1) 洗皮のはく皮及び果肉の色は焼栗とした場合

2) 筑波、利平グリの特性については昭和59年度種苗特性分類調査報告書を参考

出典：阿部 (2007)、西山嘉寛 (2012、2020b、2020c、2020d)

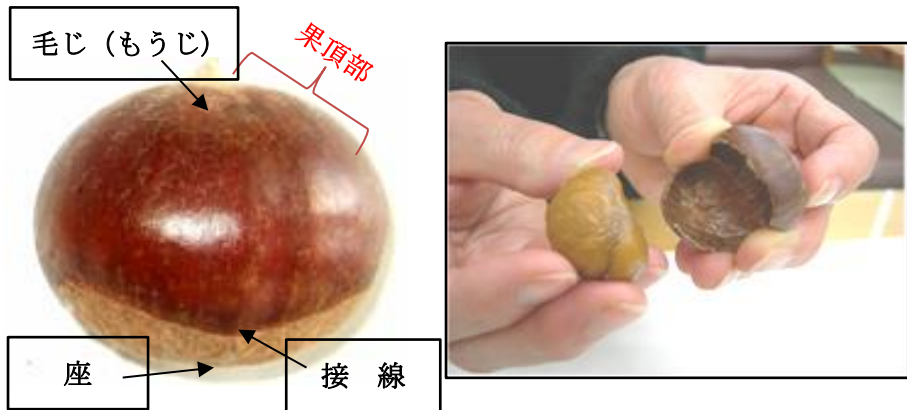


図-9 クリの部位名称

図-10 岡山甘栗 (岡山1号) のはく皮

(2) 生育特性

- ・樹勢は「岡山1号」が強く、「岡山3号」は中である (表-4 参照)。
- ・両品種とも、樹姿は直立性である。
- ・「岡山1号」の成熟期は10月上旬~中旬である。
- ・「岡山3号」の成熟期は10月中旬~下旬である。
- ・両品種ともに、開花時期は6月中旬~下旬である。
- ・「中生品種*」の筑波*や利平グリ*より開花時期はやや遅い。

表-4 品種特性

品種名	樹勢	樹姿	開花時期	成熟期
岡山1号	強	直立	6月中~下旬	10月上~中旬
岡山3号	中	直立	6月中~下旬	10月中~下旬
(参考)				
筑波	中	開	6月上~中旬	9月下旬
利平グリ	強	やや直立	6月上~中旬	9月下旬

出典：阿部 (2007) 社団法人日本果樹種苗協会 (1985)

茨城県 (1980)

傍士 360 号との
比較

* 「岡山 1 号」と「傍士 360 号」（哲西栗）の果形・サイズ比較

- ・栽培園地の中には、岡山甘栗（岡山 1 号）との混植事例も確認されている。収穫時期がほぼ重なるため、両品種のクリが混合しないよう、注意する（図-11 参照）。
- ・果皮の色はほとんど差がないが、果形は「岡山 1 号」の方が「傍士 360 号」に比べ、やや縦幅と縦横比が大きい（表-5 参照）。
- ・「岡山 1 号」の方が果頂部*に「毛じ（もうじ）」が多い。
- ・「傍士 360 号」では、一果重が平均 20 g 以上のものが中心であるのに対し、「岡山 1 号」では 10~15 g 程度と、クリのサイズは一回り小さい（図-11 参照）。



図-11 果形・サイズの比較（実物大）
（左側：岡山 1 号 右側：傍士 360 号）

出典：西山（2014c）

表-5 「岡山 1 号」と「傍士 360 号」の果形比較（同一サイズで比較）

品種・系統	一果重 (g±SD)	縦幅 (%±SD)	横幅 (mm±SD)	厚さ (mm±SD)	縦横比 (%±SD)	横幅における座 の大きさの割合 (%±SD)
傍士360号	11.5±1.1	24.6±0.9	33.5±1.0	21.1±1.3	73.3±2.8	87.9±2.5
岡山1号	12.4±1.9	27.3±1.5	33.0±1.9	21.2±1.5	82.6±2.5	83.6±3.3

注. 側果15個についてそれぞれ調査

出典：西山（2014c）

(3) 主要害虫の
被害程度

- ・葉食性害虫（オビカレハ、クスサン等）、きゅう果害虫（モモノゴマダラノメイガ等）の防除が中心となる（表-6 参照）。
- ・下記の害虫以外は、第 14 章（病虫害防除）参照。

4 苗木養成・ 植え付け

(1) 苗木養成

1) 穂木の採取

健全な穂木の確保は、その後の接ぎ木苗の良否を大きく左右するため、採取時期、採取木（母樹）には注意を要する。

確実に春先（4月中下旬）まで穂木を貯蔵するため、パラフィン処理を行う。その際、直火ではなく、湯煎を行う。

表-6 両品種の害虫被害程度

品種名	害虫被害				
	オビカレハ マイマイガ	クスサン	モモノゴマ ダラノメイガ	クリタマバチ	クリシギ ゾウムシ
岡山1号	植栽箇所で大発生あり	発生周期で大発生あり	強い	中	少
岡山3号	植栽箇所で大発生あり	発生周期で大発生あり	強い	中	少

- ・12月上旬～翌年2月下旬までに穂木（当年枝）を採取する。
- ・穂木は「パラフィン*処理」を行う（図-12、-13 参照）。
- ・市販のパラフィン（融点48～50℃程度のもの）を湯煎で溶かし、この中に接ぎ穂（5～6cmの長さに調整したもの）を素早く潜らせて、パラフィンで全体を薄くコーティングする。
- ・パラフィン処理後は、ビニール袋に小分けして入れ、速やかに冷蔵庫内で保存する（図-14 参照）



図-12 穂木の採取（当年枝）



図-13 湯煎によるパラフィン処理

（左側：同処理中 右側：同処理直後）